８愛防第６－６号
令和８年 10 月 30 日

各関係機関・団体長　様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、11 月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（11 月）

令和８年 10 月 30 日
愛　媛　県

１　予報の概要

作物名	病害虫名	発生量	その他
かんきつ	**貯蔵病害（緑かび・青かび）**	**やや多**	
	ミカンハダニ	並	
冬春きゅうり	**黄化えそ病**	**やや多～多**	
	褐斑病	並	
	うどんこ病	並	
	コナジラミ類（タバココナジラミ）	**多**	
	コナジラミ類（オンシツコナジラミ）	**やや多**	
	アブラムシ類	**やや多**	
冬春トマト	**コナジラミ類（タバココナジラミ）**	**やや多**	
	コナジラミ類（オンシツコナジラミ）	**やや多**	
	アブラムシ類	並	
冬春いちご	炭疽病	やや少～並	
	うどんこ病	並～やや多	
	アブラムシ類	並～やや多	
	ハダニ類	並	
	アザミウマ類	やや少	
	ハスモンヨトウ	並	
冬春野菜全般	ハスモンヨトウ	並	
	シロイチモジヨトウ	**やや多**	
	オオタバコガ	やや少	

※発生量は、対平年

２　気象予報（高松地方気象台）
１か月予報（令和８年 10 月 22 日発表）の解説
向こう１か月の天候の見通し　四国地方（10 月 24 日～11 月 23 日）

＜　１か月の平均気温・降水量・日照時間　＞

	平均気温（１か月）	降水量（１か月）	日照時間（１か月）
四国地方	低 10　並 20　高 **70** ％ 高い見込み	少 20　並 30　多 **50** ％ 多い見込み	少 **50**　並 30　多 20 ％ 少ない見込み

＜　予報のポイント　＞
・暖かい空気に覆われやすいため、向こう１か月の気温は高いでしょう。期間のはじめは、気温がかなり高くなる見込みです。
・低気圧や前線の影響を受けやすいため、向こう１か月の降水量は多く、日照時間は少ないでしょう。

3　病害虫の発生予想

かんきつ

(1)　貯蔵病害（緑かび病・青かび病）

ア　予報の内容　　発生量：やや多

イ　予報の根拠

(ｱ) 果実品質は、糖度は平年並、クエン酸は平年並～やや低い（果樹生育観測調査による）。

(ｲ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、発生に助長的である。

ウ　防除上の注意

(ｱ) 散布後 100ｍｍの降雨があった場合には追加散布を行う。

(ｲ) 収穫作業は降雨直後を避け、収穫・選別作業時に果皮に生傷や当たり傷を付けないように取扱う。

(ｳ) 収穫後の予措、貯蔵中の温湿度管理を適正に行い、腐敗果は発見次第除去する。

(2)　ミカンハダニ

ア　予報の内容　　発生量：並

イ　予報の根拠

(ｱ) 10 月の巡回調査では、寄生葉率は並、１葉当たり雌成虫数は並の発生である。

(ｲ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ　防除上の注意

(ｱ) 気温が低くなると薬剤の防除効果が上がりにくいので、発生園では早めに防除する。

(ｲ) 果実袋やサンテなどによる被覆は、ハダニ類の発生の有無を確認し防除後に行う。

野　菜

(1)　黄化えそ病（冬春きゅうり）

ア　予報の内容　　発生量：やや多～多

イ　予報の根拠

(ｱ) 10 月の巡回調査（抑制栽培）では、やや多の発生である。

(ｲ) 媒介虫のミナミキイロアザミウマの発生は並である。

(ｳ) 気象予報では、気温は高いとされており、媒介虫の発生に助長的である。

ウ　防除上の注意

(ｱ) 発病株は直ちに抜き取り、適切に処分する。

(ｲ) 媒介虫の卵・蛹には薬剤の効果が劣るので、発生圃場では発生に応じて２～３回防除を行う。

(ｳ) 媒介虫は雑草等でも増殖するので、圃場内外の除草を行う。

(2)　褐斑病（冬春きゅうり）

ア　予報の内容　　発生量：並

イ　予報の根拠

(ｱ) 10 月の巡回調査（抑制栽培）では、やや少の発生である。

(ｲ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ　防除上の注意

(ｱ) 換気を十分に行い、多湿を防ぐ。

(ｲ) 草勢低下、窒素質肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(ｳ) 老化葉や発病葉は早めに除去し、適切に処分する。

(ｴ) 発病初期の防除に重点を置き、葉裏まで薬液がかかるように散布する。

(3)　うどんこ病（冬春きゅうり）

ア　予報の内容　　発生量：並

イ　予報の根拠

(ｱ) 10 月の巡回調査（抑制栽培）では、並の発生である。

(ｲ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ　防除上の注意

(ｱ) 葉裏、葉柄まで菌叢が広がると薬剤防除が困難となるため、著しく病勢が進展した発病葉は可能な限り除去し、適切に処分する。

(ｲ) 窒素過多を避ける。

(ｳ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏までかかるように散布する。

(4) 炭疽病（冬春いちご）
ア 予報の内容　　発生量：やや少～並
イ 予報の根拠
(ｱ) 10 月の巡回調査では、やや少の発生である。
(ｲ) ８月の育苗床での調査では、やや少の発生であった。
(ｳ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、発生にやや助長的である。
ウ 防除上の注意
(ｱ) 育苗床で発病が見られていた場合、定植後に外観上健全な株であっても保菌している可能性があるので発病に十分注意する。
(ｲ) 萎凋・枯死株は直ちに除去し、補植用苗を定植する。

(5) うどんこ病（冬春いちご）
ア 予報の内容　　発生量：並～やや多
イ 予報の根拠
(ｱ) 10 月の巡回調査では、平年並の発生である。
(ｲ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、発生にやや助長的である。
ウ 防除上の注意
(ｱ) 発病葉や古葉はできる限り除去し、伝染源の除去、通風の確保と薬剤の付着性を高める。
(ｲ) 気温の低下とともに新しい展開葉（発病初期は展開葉１～２枚目をよく観察する）から発病し始めるため、葉裏をよく観察し、発病初期の防除に重点を置く。特に、育苗期に多発した圃場では注意する。
(ｳ) 薬液が葉裏や芽の間隙部にかかるように散布する。

(6) コナジラミ類（冬春トマト、冬春きゅうり）
ア 予報の内容　　発生量：冬春トマト　タバココナジラミ　やや多
オンシツコンジラミ　やや多
発生量：冬春きゅうり　タバココナジラミ　多
オンシツコンジラミ　やや多
イ 予報の根拠
(ｱ) 10 月の巡回調査では、冬春トマトでは、タバココナジラミは平年並、オンシツコナジラミは平年並、冬春きゅうり（抑制栽培）では、タバココナジラミは多、オンシツコナジラミは平年並の発生である。
(ｲ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。
ウ 防除上の注意
(ｱ) 定期的な薬剤防除を行い、薬液が葉裏までかかるように散布する。
(ｲ) 本虫は、多くの植物に寄生するため、圃場内外の除草を行う。
(ｳ) タバココナジラミが媒介するトマト黄化葉巻病発病株は、発見次第抜き取り、適切に処分する。

(7) ハダニ類（冬春いちご）
ア 予報の内容　　発生量：並
イ 予報の根拠
(ｱ) 10 月の巡回調査では、やや少の発生である。
(ｲ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。
ウ 防除上の注意
(ｱ) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。
(ｲ) 薬剤は、薬液が葉裏までかかるように散布する。
(ｳ) 薬剤の選択に当たっては、ミツバチや天敵カブリダニ類等への影響を考慮する。
(ｴ) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一薬剤の連用を避け、気門封鎖剤を含め、系統の異なる薬剤によるローテーション使用を心掛ける。

(8) アザミウマ類（冬春いちご）
ア 予報の内容　　発生量：やや少
イ 予報の根拠
(ｱ) 10 月の巡回調査では、やや少の発生である。
(ｲ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
ウ 防除上の注意
(ｱ) 発生が認められたら早めに防除する。
(ｲ) 雑草等でも増殖するので、圃場内外の除草を徹底する。
(ｳ) ハウス開口部に防虫ネットを被覆し、成虫の侵入抑制を図る。

(9)　アブラムシ類（冬春トマト、冬春きゅうり、冬春いちご）

ア　予報の内容　　発生量：冬春トマト　　並
　　冬春きゅうり　やや多
　　冬春いちご　　並

イ　予報の根拠

(ｱ) 10 月の巡回調査では、冬春トマトでは平年並、冬春きゅうり（抑制栽培）ではやや多、冬春いちごでは平年並の発生である。

(ｲ) 黄色粘着トラップによる有翅アブラムシの 10 月の誘殺数は、３地点中２地点で平年を上回っている（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。

(ｳ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ　防除上の注意

(ｱ) 圃場観察により早期発見に努め、発生が見られたら早めに防除する。

(ｲ) マルハナバチやミツバチ、天敵類を使用している施設では、影響を考慮し薬剤を選択する。

(10)　ハスモンヨトウ（冬春いちご、冬春野菜全般）

ア　予報の内容　　発生量：冬春いちご　　並
　　冬春野菜全般　　並

イ　予報の根拠

(ｱ) 10 月の巡回調査では、冬春いちごの寄生株率は平年並、被害株率はやや少の発生である。

(ｲ) 性フェロモントラップによる 10 月の誘殺数は、７地点中２地点で平年より多く、４地点で平年並、１地点で平年より少なく推移している（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。

(ｳ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ　防除上の注意

(ｱ)　圃場観察により幼虫や被害の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

(ｲ)　冬春いちごでは薬剤の選択に当たって、ミツバチや天敵カブリダニ類等への影響を考慮する。

(11)　シロイチモジヨトウ（冬春野菜全般）

ア　予報の内容　　発生量：やや多

イ　予報の根拠

(ｱ) 性フェロモントラップによる 10 月の誘殺数は、５地点中４地点で平年より多くなっている（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。

(ｲ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ　防除上の注意

(ｱ) 圃場観察により早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

(12)　オオタバコガ（冬春野菜全般）

ア　予報の内容　　発生量：やや少

イ　予報の根拠

(ｱ) 性フェロモントラップによる 10 月の誘殺数は、５地点中４地点で平年より少なくなっている（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。

(ｲ) 気象予報では、気温は高い、降水量は多い見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ　防除上の注意

(ｱ) 圃場観察により早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

【病害虫発生予察情報】

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。
ホームページアドレスは、https://www.pref.ehime.jp/site/byocyubojo/

【農薬使用時の注意】

◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。
◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。
◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。
◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。
◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。
◎農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。
◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。